至ツテ、德育ノ論大ニ盛ンナリト雖ヒ、美育ニ至ツテハ、寂々寥々更ニ其整理ニ着手セサルモノヽ如シ。或ハ之ニ着手セント欲スル人士ナキニ非サレトモ、却テ亦躊躇スル傾向ナキニシモ非サルナリ。故ニ予ハ本論ニ於テ、特ニ美育ニ關スル注意ノ諸點ヲ提出シ、聊カ教育家諸君ニ質ス所アラント欲スルナリ。

（同年同月十七日『時事新報』）

③ 東京美術学校創立に関する補足資料

本書第一巻第一章第二節104～106頁の記述に関し、青木茂氏、瀧悌三氏の御教示によりさらに調査した結果、新たな資料の発見があったので、ここに掲載する。明治二十年秋に欧米視察から帰国したフェノロサ、岡倉覚三らの美術学校設立準備活動に対し、欧化派が反対運動を起こし、文部省に動揺が生じ、そのために貿易協会が再度岡倉らの支援に立ち上がり、次いで岡倉らの強力な支持者である九鬼隆一が帰国して図書頭となるまでの経緯を知る手掛りとなるだろう。

●フエノロサ氏　文部雇米國人フェノロサ氏は同省の圖〔画〕書取調掛主幹岡倉覺三氏と共に圖畫取調の爲め先年歐米諸國へ赴むき去る十三日歸朝せしが恰も此度文部省官制の改正に際して美術學校を創立することになりしに付き右兩氏ハ其の創立取調委員を命せられしと

（明治二十年十月十五日『郵便報知新聞』）

◎美術取調　文部省雇米國人フエノロサ氏幷に圖畫取調掛岡倉覺三氏は圖畫取調の爲め歐米各國を巡廻して去る十二日歸朝し以後ハ美術學校創立事務を擔任するよしなり

○東京美術學校　同校設立のことに付てハ種々議論ある由なるがフエノロサ岡倉両氏にハ非常に盡力し居る由なり　又同校ハ當分帝國大學植物園の側なる舊圖畫取調所を以て之に充てらるゝよし

（同年同月二十日『朝野新聞』）

●東京美術學校　文部省にて今度創設する東京美術學校ハ小石川區植物園構内の舊圖畫取調掛官舍を其儘用ふる筈なりしが又た他に新設せんとの議も起り目下尚ほ協議中なり　尤とも同校創立取調委員なる同校幹事岡倉覺三氏は差し向き右圖畫取調掛官舍へ出頭して事務を執り又た本省文書課へも出頭して種々取り調べ居れりと

（同年同月二十一日『郵便報知新聞』）

○美術學校　文部省にて美術學校を設置するとのことハ豫て記るせしが曩に歸朝せし岡倉幹事御雇フエノロサ氏等の盡力に依り其の方案規則も整頓したれバ來春までにハ開校の見込なりと云へり

（同年十二月二十一日『朝野新聞』）

建言書

文部三等技師山①口半六　工科大学教授辰②野金吾　文部大臣子爵森有禮閣下ニ建言セン　半六等常々窃ニ美術学校設立ノ挙アランヿヲ希望スル已ニ久シ　而メ文部省モ亦向〔さ〕キニ玆ニ見アリテ今ヤ新ニ東京美術学校ヲ創立シ以テ美術教育ノ業ヲ企圖セラル　誠ニ半六等ノ

素懐ニ背カズ　而シテ欣喜踴躍措ク能ハザル所ナリ　是レ実ニ吾邦美術教化ニ関スル一大重要ノ件ナリ　將来ノ方針進路ニ於テ宜ク考按ヲ要セサルベカラズ　半六等不肖時事ヲ暁ラズト雖モ唯タ其レ美術ノ事ニ於テハ夙ニ憂慮計畫スル所アリ　依テ聊カ鄙見ヲ乞ニ略陳シ以テ閣下ノ賢明ヲ煩ハサントス

夫レ美術ノ事タルヤ人類精神上自然ノ現象ニ由ルモノニシテ其学理ヲ論究スルモノ希臘國ノ哲学者プラトー以後其人誠ニ尠カラズ然リト雖モ審美学ノ一科ハ自他学術ト差々異ナル所アリテ理論ノ分析未ダ其全部ニ渉ラズ　故ニ美術上總テノ現象ヲ辨明スル單ニ理論ニ頼ルヲ得ズ　乃チ甲乙学者ノ論ニ於テモ往々符合セザル所アリ又縦令ロ能ク之ヲ論ズルモノアルモ手能ク之ヲ應用スル能ハズ　之ニ反シテ口常ニ其技ヲ演スルニ下拙ナルモ実地之應用ニ至テハ其巧妙歎賞ニ剰リアルモノアリ　世ノ美術家ト称スルモノ抑モ亦甄別観察シ易カラサル也、

蓋シ美術学前途ノ進歩ヲ計ラント欲セバ宜ク先ツ其卓論ヲ詮索セザルベカラズ　而シテ其之ヲ詮索スル又難シ　唯タ一法アルノミ他ナシ美術家ノ與論ニ準據スルナリ　乃チ実景ノ雅致ナリ意匠ノ高妙ナリ善ク之ヲ寫シ巧ニ之ヲ画キ又其理ヲ論シ其学ノ蘊奥ヲ窮メタル美術家ヲ罔羅集会シ深ク謀リ博ク議シ以テ論理應用共々可ナルモノヲ撰擇シ而後衆説ニ拠バ則チ所謂真正ノ卓論自ラ現出シ美術ノ実用隨テ擴張セン　如此ニシテ前途漸ク改良ニ歩ヲ進メハ敢テ大過ナカルベキ歟

但シ佛伊ノ両国ハ先キヨリ已ニ美術ニ著名ナリ　以テ成シ得ベクンバ則チ宜ク前両國ヨリ名家ヲ聘シ或ハ之ヲ顧問トナシ或ハ時議ニ参賛セシム可シ　是レ啻ニ彼我美術比較上ノ益ノミニ止マラズ其所要勿力モ亦タ必ズ鮮少ニ非ザルベシ　方今美術教育方針ノ如キ実ニ軽忽ニ付スベカラズ　悪ゾ一人ノ私見ニ放任スベケンヤ　又唯タ宜ク公聽並観シ群議以テ之レカ衷ヲ裁セザルベカラザルノミ

説ヲナス者アリ曰ク東京美術学校ニ於テハ皇國古代ニ於ケル美術大家ノ遺蹟ヲ探リ以テ美術ノ再興改良ヲ計ルベシト　半六等熟々按スルニ美術ノ發達ハ時勢之然ラシムル所ニシテ又名流大家ノ輩出スルニ因ルモノナリ　且ツヤ皇國古代ノ美術ハ取モ直サズ古代社会ノ孕生スル所ナリ。而ルヲ今人ニシテ古人ノ精神思想ヲ有スルモノハ恐クハ又之レナカルベシ　故ニ今日古代美術ノ再興ヲ謀ルハ何ンゾ木ニ縁リ魚ヲ求ムルノ旨意ト同一轍ニシテ実際ニ於テ成シ得ベキモノニアランヤ　假令之レカ遺蹟ヲ探求スルモ偶々其摸擬者ヲ得ルアルノミ　而シテ其摸擬者タル所謂真ノ摸擬者ニ過キズシテ遺蹟ノ古実ハ決シテ探求シ得ベカラザルナリ　如此ニシテ悪ゾ美術ノ改良發達ヲ企望スベケンヤ　是ニ由テ之ヲ言フ　今日ノ実況タル未ダ美術ノ改良ヲ企ツヘキ時期ニ達セズ　之ヲ要スルニ宜ク先ツ美術教育ノ道ヲ設ケ以テ其進歩ノ端緒ヲ開クベキノ秋ナリ　而ルニ美術中彼ノ絵画ノ如キハ其種類最モ多ク而シテ各自又其流派ヲ異ニセリ　識ラズ東京美術学校ニ於テハ果シテ何派ヲ是トシ又ハ何派ヲ非トスル乎

想フニ是レ実ニ今人ノ凡眼ヲ以テ判定シ易カラザル所ナリ　是故ニ凡そ我邦内ノ人ニシテ真ニ美術ノ妙ヲ得タルモノアレバ則チ普ク駆テ之ヲ師壇ニ登シ用キテ以テ子弟修学ノ道ヲ開クベシ　今ノ時復タ何ゾ流派ヲ論ズルニ遑アランヤ　顧ミレバ古今吾邦ノ文物皆泰西ヲ法ル　而シテ泰西ノ美術固ト已ニ灼々乎トシテ火ヲ見ルカ如キハ

半六等ノ贅言ヲ要セザルベシ　其然リ　奈何ゾ〔いずくん〕美術ニ限リ吾邦固有ノモノヲ以テ足レリトナシ之ヲ泰西ニ法ラザルノ理由アランヤ　因テ謂フ　今回設立ニ係ル東京美術学校ニ於テモ亦宜ク泰西諸名流ノ技術ヲ採擇シ本邦美術ト並用シ以テ後進子弟教訓ノ資ニ補セハ他日必ズ卓論ノ士ヲ得テ美術ノ改良進歩ヲ企畫スル敢テ難トナサヽル可シ

是レ半六等ノ確信シテ疑ハサル所ニシテ又夙ニ熱望ニ堪ヘサル所ナリ

以上僭越不遜ヲ顧ミズ妄ニ蕪辞ヲ吐露ス　敢テ請フ　閣下　苛モ以テ取ルニ足ルモノアラバ速ニ採納ノ栄ヲ賜ハランヿヲ　誠恐誠懼頓首謹言

文部三等技師　山口半六
工科大学教授　辰野金吾

文部大臣子爵森有禮閣下

美術学校設立ノ儀ニ付建言

小官仄カニ承ルニ今般文部省ニ於テ美術学校ヲ設立セラレ美術教育ノヿヲ計ラレ該校ノ組織規模及前途ノ方針等ノ如キハ挙テ是ヲ米国哲学者フエネロサ氏ニ委嘱セラルト　是実ニ美術教化ニ関スル重要ノ件ナリ　謹テ鄙見ノ二三ヲ左ニ開陳ス

一美術学校ノ組織規模方向ハ美術有識者ノ衆説ニ依テ定メラレタキヿ

夫レ美術ノ事タルヤ人類精神上自然ノ現象ナリ　其学理ニ於テハ希臘国ノプレートラ〔ママ〕以来哲学者ニシテ美術ヲ論究スルモノ少ナカラズト雖モ今日ニ至ルマデ審美学（エスーエ〔テ〕チック）ノ理論ハ其他ノ学術ノ如ク理論ノ分析其全部ニ渉ラズ　故ニ理ニ據リ總テノ現象ヲ辨明スルヲ得ズ　又甲ノ学者ノ論ズルトコロト乙ノ学者ノ述ブルトコロ学理上常ニ符合スルノ程度ニ至ラズ　現今ニテハ美術ノヿハ唯精神上ノ感覚ト実験的ノ視覚トニ拠リ成立ツモノナリ　依是見之美術学校ノ組織方向之如キハ可及的美術ノ感覚ニ敏ニシテ視覚ノ実験ニ富ミタル人ヲ皇国中普ク索メ加フルニ美術ヲ以テ著名ナル佛国或ハ伊国ヨリ一人若クハ数人ノ美術家ヲ聘シ以テ創立委員会ヲ組織シ其決議ニ依リテ定メラレ着手ノ後ト雖モ同校ノ改良進歩前途ノ方向等ニ備ルヿハ總テ該創立委員ノ中ヨリ特撰セラレタル評議員ノ決議ニ依リテ計ラレンヿヲ希望ス（今直ニ佛伊国ヨリ美術家ヲ聘スルハ事情為シ難キ場合ニ於テハ本邦ノ有識者ノミニテ創立委員ヲ組織スルモ亦可ナリ）唯一人ノ哲学者ノ意見ニ専任セラルヽ如キハ小官ノ鄙見ヲ以テスレバ其策ヲ得タルモノトハ信ゼラレザルナリ

一日本固有美術ノ改良ハ現今成シ得ベキニアラザルヿ

説ヲナス者アリ曰ク　美術学校ニ於テハ皇国古代美術大家ノ遺蹟ヲ探求シ其再興ヲ企図シ其改良ヲ計ルベシト　小官熟々考フルニ美術ノ發達ハ時勢ニ然ラシムルトコロナリ　皇国古代ノ美術ハ其時ノ社会ノ生ム所ノモノナリ　今ノ人ニシテ当時ノ人ノ精神思想ヲ有スルモノハ恐クハ無カラン　故ニ今古代美術ノ再興ヲ謀ルハ木ニ依テ魚ヲ求ムルト同一轍ニシテ実際上成シ得ベキモノニアラズ　今若シ其遺蹟之模擬者ヲ得ルモ模擬者ハ実ニ模擬者ニ過キサルベシ　之ニ拠リテ其改良ヲ謀ルト云フ其目的ヲ達セザルハ眞ニ見易キノ数ナリ

非常ノ大家ニアラズシテ何ゾ古代大家ノ技術ヲ凌駕シ得ベケンヤ

如何ニ哲学者アリテ指揮教訓ヲ加フルトモ前陳ノ如キ改良進歩ハ到底望ムベカラザルナリ

一美術学校ニ於テハ東洋ノ美術泰西ノ美術共ニ其流派等ヲ論ゼズ可及的広ク採用セラレタキヿ

前ニ陳述スル如キ有様ナレバ今日ハ未ダ美術ノ改良ヲ企ツベキノ時期ニ達セズ　故ニ宜ク美術教育ノ道ヲ設ケ其進歩ノ端緒ヲ開クベシ　現今美術中繪画ノ如キハ其種類尤多ク各自ニ流派ヲナス　今美術学校ニ於テハ何レヲ以テ是トシ何レヲ以非トシ何派ヲ採テ何派ヲ捨ツ可キカ今人ノ凡眼ヲ以テ容易ニ判断シ得ベキニアラズ　故ニ其妙ヲ得タル者アレバ是ヲ登用シ以テ師トナシ其流派ヲ論セズ子弟ヲシテ研究セシム可シ　依テ現今其人アルノ各流派ハ總テ採用シ共ニ並ベテ教授ノ道ヲ開カレンヿヲ希望ス　又当今我邦ニ於テハ父祖皆泰西ニ法ル　泰西ニ於テ美術ノ赫々タル敢テ小官ノ贅言ヲ待タズシテ明ナリ　今何ゾ美術ニ限リ我国ノ固有ノモノヽミニシテ足レリトシ泰西ヲ採ラザルノ理アランヤ　今回設立ノ美術学校ニ於テハ泰西各派各流ノ美術ヲ採用教授アラレンヿ小官懇望ニ堪ヘズ　如此各流派共ニ孖〔孜カ〕々トシテ子弟ヲ教訓スルヿ時アルニ及ハヽ自然ノ便磨ニヨリ後日抜群卓見ノ士ヲ得始テ美術ノ改良進歩ヲ計リ得ベキヿハ小官ノ固ク信ズル所ナリ

一油畫ノヿ

現今美術学校創業之際直ニ数多キ美術ノ各種類ヲ總テ採用セラルヽヿハ到底望ムベクモ行フベキニアラザレバ皆同時ニ着手セラルヽヲ要セズ　美術ノ各種類モ本邦ノ現況ニ據リ宜ク其軽重緩急ヲ酌酌シ先ツ最急務ナル種類ヨリ漸次採用シ以テ擴張セラルヽヲ善シトス　美術中範圍最モ大ナルハ繪画ナリ　繪画ノ各種類中最モ優リ最モ美ナル成蹟アルハ油画ナリ　故ニ油画ノ教授研究法ヲ第一着ニ美術学校中に置カレンヿヲ希望ス　本邦ノ画法ニハ見ルベキモノ甚多ク優ニシテ美ナルモノ少ナカラズト雖モ目下政府ノ保護奬励ヲ仰ザルモ自立維持難キニアラズ　美術学校ニ於テ油画教授法稍整フノ後本邦ノ画術教授法ニ及ボスモ亦遅シトセズ　油画法ノ美術上重大ノ問題ナルヿ前ニ陳ブルガ如シト雖モ今我国ニ其妙ヲ得タル人ナシ故ニ此美術学校ニ於テ油画法教授研究ノ道ヲ開クハ今日我国ノ美術進歩上一日モ忽ニスベカラズト小官固ク信ジ又懇望ニ堪ヘザル所ナリ

以上ノ數言僭越ヲ省ミズ之ヲ開陳ス　閣下若シ採納ノ栄ヲ賜ハラハ幸甚

明治廿年十二月　　文部三等技師　山口半六

〔右の二篇は小山正太郎関係資料中に含まれているもので小山潤氏の御厚意により掲載させて頂く。ともに同種の罫紙に毛筆で清書(所々に朱で訂正が入れてある。)されており、二篇がこよりでとじて一冊となっている。フェノロサや岡倉覚三らが独自の美術学校構想に基づいて設立準備にとりかかろうとしていたのに対して欧化派が反撃に出ようとしたことを示す資料である。後出の新聞記事と照らし合せてみると、この文書と近い内容の建議書が森有礼に提出されたものと考えられる。

なお、山口半六(一八五八〜一九〇〇)はフランスで土木、建築を学び、帰国後明治十八〜二十四年の間、文部技師をつとめ、理

科大学や第一高等学校をはじめとする多くの学校建築を設計した。明治二十二年に小山正太郎、浅井忠らが明治美術会を結成するや賛助会員となり、幹事もつとめてこれを応援した。一方、辰野金吾（一八五四～一九一九）は工部大学校造家学科第一回生。イギリス留学から帰り、上記造家学科、次いで工科大学の教授となった。コンドルとともに日本の建築学の開拓者といわれ、日本銀行本店その他の設計に従事している。彼も明治美術会結成とともに入会し、また幹事となり、明治二十七年頃同会教場が明治美術学校となったとき校長に選ばれた。」

◎會議初め　文部省にては一昨日午後辻文部次官を始め各局長參事官等集會して會議を開きたる由なるが是は美術學校設置の位地に關する協議なるべしと云へり

（明治二十一年一月九日『時事新報』）

◎美術學校　東京美術學校の位地に付ては文部省にて種々協議中の趣なりしが今度高等女學校を帝國大學構内に新築して不日落成の上は直ちに移轉の都合なれば從來の同女學校を以て美術學校に充て追て上野公園地内四軒寺町同省用地即ち音樂所（音樂取調掛）の隣に新築の筈なりといへり

（同年同月十九日同紙）

◎建議案會議　木挽町の貿易協會にては來る二十六七の兩日を期し其筋へ建議の爲め役員會議を開く筈なりといふ

（同年同月二十四日同紙）

●日本風美術論と西洋風美術論の爭ひ　本邦固有の美術を外國向きの雜貨類に應用することに就ては既に昨年の三月東京貿易協會より其筋へ建議する所ありしが政府に於ても頗る此の點に注意し殊に文部省雇の米國人フエノロサ氏幷に同省の岡倉覺三氏を歐洲へ派遣して美術學校の事と此の應用の事とを併せて取調へしめ兩氏は既に此の取調を了へて歸朝し美術學校も追々設立の運ひに至りしか近來或る筋に於てハ「繪畫の妙は人物鳥獸草木を寸分違ハす有の儘に寫し出すに在り　左れは日本風の繪畫よりも矢張り寫生の西洋油畫こそ其の妙を極めたるなれハ自今本邦の繪風を改めて西洋油繪風を採用すへし」との說稍々勢力を得たる由なるか又た他の一方に於ては大に此說に反對して「原來本邦の陶器、磁器、漆器其他の雜貨類か歐米諸國に用ひらるゝハ品質の佳きか爲めにあらす又た能く實用に適ふか爲めにあらす唯た之れに應用せる日本固有の繪摸樣が外國人の好尙に適するの一點にあるのみ　今ま若し我か雜貨に西洋風の畫摸樣を着けて試に之を外國の市場に持ち行き見に決して買手なかるへし　其の適例は明治十五年頃よりハ何品にも必す西洋の繪具を以て西洋風の畫摸樣を着けて輸出せしに是は西洋を眞似たる品にて日本固有の風致を失へるものなりとて忽ち擯斥され漸く十八年に迨んて始めて當業者目を醒まし外國人の實用に適ふ品に我か畫摸樣を着くれハ必ず捌け方宜しかるへしと心附き西洋風の畫模樣を着ることの得策にあらさるを知るに至れり　然るに今や本邦美術の根源となるへき美術學校を設立するに際り萬一油畫說勝を制するか如きことあ

らハ後來我か雜貨類ハ外國の市場より擯斥され貿易上に非常の影響を與ふへし」との說を主張し目下其筋にて一の問題となり居れるが此事に就き貿易協會に於ては來る二十七日幹事會を開き政府に於て美術上の事に一定の主義を定め置かれんことを望むへしとの動議に付き相談を爲す由なり

（同年同月二十五日『郵便報知新聞』）

◎貿易協會の建議　此程の時事新報紙上に木挽町の同協會にては今明兩日役員會議を開き其筋への建議案を議するよ志揭げしが今聞く所に據れば右の建議は美術學校設立に關する者にして同協會の役員諸氏は既に昨春の頃も美術學校設立の儀に付て其筋へ建議せし事ありしに幸にして其筋にても多くの贊成者ありて遂に美術學校設立の事は其目的を達志文部省にてハ一昨年フエノロサ氏岡倉氏等をして歐米美術學校の組織よ里歐米後來に於ける美術の傾向趨勢等迄委細に調査せしめ昨冬歸朝の後は愈々完全なる美術學校を設立せんと昨今彼是評議中なれども兎角種々の說ありて或ハ同校は純然其土臺を西洋油畫に爲さんとの說も流行し居る由　然るに同協會の諸氏は斯くては先年建議の趣意に戻るのミならず大に我國後來貿易上の利害に關する事なれば是非とも別に工風を爲さゞる可らずとて遂に再び建議する事に決せし由なるが其大意は元來西洋の油畫なる者は出來る丈け物の眞を寫し其眞に迫るを以て尊び之に反して我國の畫ハ必ずしも其物の眞に迫るを要せず充分に意匠を運らし其意匠の巧妙なるを喜ぶの風あるより自然其畫に一種の氣韻を生し人をして展覽の際云ふ可らさるの妙を感せ志むる事にて是れハ西人の模せんと欲して模する能ハす獨り日本人が專有する所の技藝なり　今日歐米人が日本の陶器其他の物品を買ふ者多きは全く日本畫の意匠の一種なるを喜んで買ふ者にて日本美術の聲譽は今後益歐米に盛なるを致し從て我貿易の繁昌も期すへき者あるに今若し美術學校を設立して其土臺を西洋油畫の組織に爲すあらは我國將來貿易の盛衰に關する實に少小ならざれは須らく日本在來の畫を土臺として益々其改良進步を圖り以て將來貿易の繁昌を圖るべし云々の趣意なりと云ふ

（同年同月二十六日『時事新報』）

◎東西美術論　先ごろ政府ハ米人フエノロサ氏文學士岡倉覺三氏をして歐米各國の美術取調べの爲め洋行せさせられ其復命の結果により日本固有の繪畫の地位を高くし天晴我邦ハ我邦の工技を改良保存して美術を各國と爭ふべしといと賴母しく思ひ居たるに此反對論の油繪信仰說頻りに上流社會に行はれ伊太利亞公使も其說を或筋へ申出られたりとか　又西洋風の建築など爲す者ハ自然油繪黨となるより貿易協會などにても其孰れに從ふべきやに困じて其筋へ東西孰れにか標準を定められたしと請願する筈なりといふが諸美術の母たる繪畫の標準が內の好みによりて確定せられずして外の好みによりて定められゝの傾きありとハ歎かはしき事なり

（同年同月二十八日『讀売新聞』）

◎貿易協會の臨時會　貿易協會にてハ昨日午後四時より臨時會を開き美術上繪畫の主義を東西孰れにか確定せられんことを政府に建議する事及び商品標本陳列所の件に付協議されたり　委細ハ聞き得て

次號に記すべし

（同年同月二十九日『読売新聞』）

◎日本の美術　今度美術學校を設立するに付ては世間種々の言をなす者あり　其一に曰く西洋の油畫は出來る丈物の眞を寫し日本の畫ハ意匠の巧妙なるを尊ぶ　故に我國の畫には一種の氣韻ありて其妙西人の得て模すべき所に非ず　日本の美術は飽迄も意匠的たるべし云々と　若しもプラトン　ウエーマン　ウスキン（ラカ）の美術學一册を繙きたる者ならんには（畫を見ても到底分らす）決して此等の言をなさざりしなるべし　嗟乎盲人蛇に怖れす　傲然として彼と我とを對照し却て日本畫工の妙を稱せんとす　知らす　日本の陶器類が西洋に販賣の路を得たるは唯其畫の simple にして珍らしきが故なることを　之を以て眞に美術的の意匠に出つるとなす　自惚に非すして何ぞや　頃日此所謂意匠的の論を以て政府に建議したる者ありと聞く　政府の聰明なる決して採用せさるべしと雖も婆心止む能はず一言を呈すること爾り　在淺草　仲　公

（同年同月三日『時事新報』寄書欄）

◎貿易協會の建議　貿易協會にてハ一昨日の例會に於て美術上の義につき至急其筋へ建議することに決したる由　今其建議の由來を聞くに先年來我邦の美術品にして歐米に輸出され歐米人の賞讃を博したるもの少からず　後來ます〳〵歐米人の賞愛を來し之れが輸出も追々增加せんとするの勢なるも是まで輸出されたるものハ重もに華族舊家の祕藏品たる古器物に止まるを以て邦人或ハ歐米人が之れを賞愛するの眞意を悟り得ずして唯に古器物なるが故に賞愛さるるものゝ如く思ひ做し歐米に輸出して賞愛を受くべきものハ獨り古器物たる骨董の類に限るものと思惟する者あれども是れハ甚だ見所を誤りたるものにて歐米人の我が美術品を賞愛するものハ決して其の古器物たるの故を以て賞愛するにあらずして全く之れに施したる繪畫彫刻の一種特別なる風致あるを愛（め）づるに因るものなり　歐米人にして此特殊の風致を賞愛するものとせバ其れをしてます〳〵我が美術を賞愛せしむるの方法を講ずるハ最も今日の急務にして歐米人の日常使用する所の什器飾付品等に我が繪畫彫刻を施して之れを輸出せバ更に幾層の賞愛を博し後來一廉（かど）の貿易品となるや疑ひを容れずとて一昨十九年の三月貿易協會より此儀を其筋に建議し政府に於て特に一省若くハ一局を設け行政上より十分に我が固有の美術を保護せられんことを請ひしに其筋に於ても我が美術を歐米人の使用する器具に應用するの主意を嘉納せられ嚮（さき）に御雇フエノロサ氏並に岡倉文學士を歐米に派遣して取調べらるゝ事となり其の出發の期に臨みて一の美術學校を設立さるゝ事に定まりフエノロサ岡倉の兩氏ハ其取調を終へて先頃歸朝され美術學校もいよ〳〵設立なりしに近來其筋に於て美術上の議論二派に分れ一ハ則ち前記の如く日本固有の美術をます〳〵發揚せしむべしと云ふにありて他ハ全く之れと異なり歐米の美術を摸擬して繪畫に彫刻に皆な眞物を直寫するの方針を取るべしと云ふにあり　去れど前にも述ぶる如く歐米人の我が美術を賞愛するものハ一に我が繪畫彫刻の一種特殊の風韻あるに由るものなれバ若し我が固有の美術を棄てゝ歐米の美術を摸擬するが如きことあらバ以前の賞愛に引換へ忽ち歐米人の冷評を受くるハ必然にして

其結果たる大に我が貿易の衰頽を來すべし　現に形のみを歐米品に擬して製造したる器具の如き歐米人ハ其擬造を冷笑して更に賞愛するの意なく大に失敗を招けるにあらずや　然るに此上其彫刻繪畫までも彼れに摸擬するときハ其結果果して如何ん　敢て識者を待て後に知らざるなり　故に我が美術ハ飽くまでも我が固有のものを發達せしめ擴張するの方針を取ること最も必要なりとて今度の建議ハ前年の建議の趣意を何處までも採納せられ斷然此方針を取られたしといふにある由　其擴張の方法の如きハ今日とても隨分繪畫彫刻の名人に乏しからず且つ古人の法とるべきもの少なしとせざれバ此等を手本として授くるときハ甚だ難きにあらずといふ　又た商品陳列所の件ハ次會に議することになり一昨日ハ之れに議及されざりし由

（同年同月同日『読売新聞』）

◎美術學校に關する說　此程の紙上に貿易協會よ里美術學校の事に付其筋へ建議する由を記せしが尙ほ聞く所に依れば今度同校を起すに付て既に其主任の人々ハ是非同校は純然たる日本美術を研究せしむる樣に爲すべしとて略ぼ其意見を確定し過日愈々其筋の評議に掛くる場合となりしに玆に反對者現れ元來美術なる者ハ其畫の能く眞に迫るこそ美術なり　左るを日本の畫の如く唯だ意匠々々とのみ云ふて其眞を失ふが如きは所謂美術の義に逆る者なり　然るに斯る不規則なる日本畫を以て我國美術の基礎と爲すが如きは以ての外の事なり　日本畫ハ斷然之を棄てゝ專ら油畫を採用すべしとの議論起り爾來雙方の議論撞突して昨今評議中なれば貿易協會にても其未だ何れとも定らざるに及んで早く其利害の商業に及す所以を建議すべしとて遂に建議せし趣なるが要するに雙方の議論共に皆な其極端に馳せ或ハ純然油畫にすべしと云ひ或ハ純然日本畫にすべしと云ふ事なれども抑油畫の物を寫して眞に迫るは美術上如何にも貴ぶべき所にして日本畫の意匠に富んで風韻雅致の多きも之れ亦た美術上棄つ可からず　然れとも眞を寫すに巧なる者其弊意匠に乏しく意匠に妙なる者寫生を欠くの憂へあり　今日本畫の油畫に於ける相互に長短得失ありて決して其一を偏取すべからず　去れば專ら油畫にするとか或ハ日本畫にすると云ふ事は甚だ面白からず　寧ろ美術學校を立るとならば最初三四年の間ハ油畫を學バしめて然る後ち日本畫を學ぶの組織に爲さば尤も妙なるべし　斯くせば先づ實物寫生の技に通したる其上に充分其意匠に意を用ふる事ゆえ奔放亂雜の弊に陷らずして巧に意匠を運らすを得べし　譬へば猶ほ楷書を學びし後に草書を學べば其手跡の立派なるが如し　且つや專ら日本畫を基礎にすべしと云ふ說は日本の陶器が西洋に輸出して泰西人の賞玩する所となりし事も重なる源因なれども或る佛蘭西邊の美術の大家中には隨分日本の美術を齒牙に掛ぬ位に云ふ者さへある事にて西人の一般が日本繪畫の意匠を喜ぶ譯にもあらず　加之或は彼等は一時の珍らしさに之を購ふの氣味あり　然らば今日我國美術學校を立るに際しては唯だ一時の商賣に惑ふて本來容易に斷定し難き東西美術の間に彼是の優劣を定め以て眞成なる美術の發達を害するが如きあらば誠に輕卒の擧動と云はざるへからず　兎に角今日我國に美術學校を立るに付ては輕卒に事を定む可からずと此道に熱心なる人ハ物語れり

（同年同月四日『時事新報』）

社説

○美術の事に付き某二三新聞の冷淡に驚く

安政居士

〔上略〕

夫の專ら西洋の美術を採用せんとする論派に對してハ前日來本紙上已に論じて筆鋒爲めに禿せることなれバ之れを止めて玆にハ即ち某新聞に記せる新奇説のみに付て一言せんと欲す　其説に曰く「前畧

美術學校を立つるとならバ最初三四年の間ハ油畫を學ばしめて然る後日本畫を學ぶの組織になさバ尤も妙なるべし　斯くせバ先づ實物寫生の技に通じたる其上に充分意匠に意を用ふること故云々　譬バ楷書を學びたる後に草書を學べバ其手跡の立派なるが如し云々ある佛らんす邊の美術の大家中にハ隨分日本の美術を齒牙に掛けぬ位に云ふものさへあることにて云々」と云へり　居士ハ此立派なる折衷説にも拘らず同意する能はざるなり　今前例に基き繪畫に依て論ぜんに西洋美術の貴ぶべき處ハ其眞に迫るにあり日本美術の秀づる處ハ風韻雅致に在りとハ何人も已に知る處なり　然り而して孰れか美術の眞味に適するものなるやと云に此點ハ曾ても論ぜし如く美術の主たる點ハ人間の感情に訴へて唯に其事物の形容の外に其精神をも寫し出すを以て貴しとするに在れバ何程形容眞に迫れバとて夫の寫眞を見るが如く何等の感情をも起すに足らざれバ決して美術の眞味を得たるものにあらざるなり　之に反したとへ眞に迫らず奔放亂雜なりとするも其間に一種の風韻雅致ありて云ふべからざる精神を有するものあれバ實に美術の眞味を得るものなり　果して然らバある説者の如く日本繪の寫生を欠くと云ふを決して憂へざるなり又説者ハ西洋畫の寫生を學んで而して后ち日本畫の風韻雅致を學ぶべし　譬バ楷書を學んで而して后ち行書を學べバ其妙を得るに同じと云へり　其意を推せバ日本畫從來の學び方ハ楷書を學ばずして直に行書に入りたるに均し　故に其の妙を得ざりしなりと云ふが如く考へらる　若し然らバ説者ハ何の點を以て日本從來の繪畫學び方ハ最初より行書に入るに均しと見認むるや甚だ其意を解するに苦むなり

説者ハ日本畫なるものハ其學び方必ず最初より奔放亂雜なるものを學ばしむるに限ると思ひ居るや　居士ハ此點も念の爲め聞かまほしく存ずるなり　故に居士ハ西洋畫の眞に迫るものを棄つるにあらざれども日本畫を學ぶに最初に西洋の寫生を學ばしめんとするの必要を毫も見出す能はずとす　其他説者の佛ランス人抔ハ日本美術を齒牙に懸けざるに至りたり抔と云ふことハ毫も慮かるに足らざることゝ考ふ　何如となれバ一二の佛人ハイザ知らず獨乙なり英國なり一般に於て日本美術の風韻雅致を愛することハ今や爭ふ可からざる事實に係れバなり

夫れ已に斯の如し　然らバ某新聞の雜報欄内に掲載せる新奇説ハ如何にも珍奇説にして某新聞の議論なる乎將たある人の物語りを記載せるものなる乎何れにしても取るに足らざるの説と謂はざるべからず　若夫れ説者にて尚ほ了解せずんバ本紙三千九百十六號以來に掲ぐる意見を看るの勞を取れ

嗚呼某新聞ハ斯の如き重大なる美術採用の問題を雜報欄内に掲げたり　某新聞自家の説か否やハ知らず既に一種の新奇説を考へ出して

揭げたり　然るにも拘らず冷淡にも結文に於て或る人ハ物語れりと乎雑報體にして某新聞自からの説なりとして能く公論することをなさず　何故に斯く目下の一大問題たることを知る上に之れを論ずる本分あり責務ある任にあり乍ら因循躊躇平氣然たるや　居士ハ之れ亦其意を解せざるなり　但し某新聞而已ならず他新聞に於ても今少しく深切ならんことを忠告せんと欲す　若し夫れ新聞紙なるものハ營利の一具にして時好に投ずるを肝要とするを以て世人の好まざる美術論抔を揭げて得意を損ひ讀者の意を邀ふ能はざるが如きことハ得策にあらずと云はゞ居士復た何をか言はんや／／

（同年同月七日『読売新聞』）

〔前出二月四日付『時事新報』の記事に対する反駁である。なお、『読売新聞』は二月一日、四日、十一日と社説に両極道人の「再び美術の事を論ず」、同続篇、「美術工芸論」を揭げ、フェノロサ・岡倉派を支援している。〕

●美術學校創立の協議　同學校を創立するに當りては政府か美術上に一定の主義を定めんことを希望するものあり　現に貿易協會員の如きハ前號の紙上にも揭けし通りの意見を文部大臣へ建議せしか文部省に於ても同校幹事岡倉覺三氏等專ら其の創立に係る取調中にて一昨日も辻〔新次〕次官、濱尾〔新〕專門學務局長、高嶺〔秀夫〕高等中學校教諭等集合し同校創立上の件に付き會議を催ふしたり

（同年同月八日『郵便報知新聞』）

◎美術學校に係る會議　文部省にては一昨六日午後三時より辻文部次官、濱尾專門學務局長、高嶺高等師範學校教諭、村岡高等中學校教頭、岡倉美術學校幹事等の諸氏が美術學校に係る會議を開きたるよし

（同年同月同日『時事新報』）

○美術学校（同年同月同日『朝野新聞』。）

〔この記事は本書第一巻104、105頁に引用した。〕

●鑑畫會の演説　同會は來る十二日午後一時より木挽町の貿易協會に於て例會を開き諸家の繪畫を陳列して縱覽を許し且つフエノロサ氏（日本美術工藝の將來如何）岡倉覺三氏（東洋社會に於ける美術の地位の沿革を論す）の演説あり　有志者にハ無料聽聞を許す由

（同年同月九日『郵便報知新聞』。同紙広告欄に同一内容の広告も掲載されている。）

○美術專門家の話　我邦美術學校の事に就き昨日の紙上にも揭載する所ありしが今ま某專門家に就き佛蘭西日耳曼英吉利等諸邦の教授方法を聞くに何れの國にても最初の三年間は專ぱら木炭畫を學はしめ其の上にて油繪に入るもあり或ハ造家に或ハ彫刻に夫れ／／專門の部類に入らしむる由なるが木炭畫より油繪に移らんとする際にハ水畫を學ばしむるもあれども大概は木炭畫より直ちに油繪に移らしむるが如し　又た其の油繪にハ三種類ありて一ハ實物摸寫を主とし一ハ實物を畫くに想像を加へ一は想像を主として實物を參照す　而して此の中にて最も可なるは第二の者なるべしと雖も畫を學ふにハ

右の三者を研究せざるべからず　此の三者は猶ほ我が邦書風に楷行草の三體ありて楷書の筆法を學びたる者ハ行草ともに學び易かるべきも若し然らずして直ちに行若しくハ草を學はしめハ破格の字を寫出せざるハ殆んど危し　西洋風の畫を學ふも亦た同一の理にて始めに實物摸寫を學ハしめざれバ完全なる畫を畫くこと能ハざるべし

現に先年舊工部大學校の教師たりし伊太利人某氏は頗る磊落の畫を畫く人なりしが生徒ハ皆な之れに摸倣することを勉めし故後日に至り其の畫風を變して精細綿密なる畫となさしめんことを勉めたれども終に其の効を奏する能はざりし　此の一例に就ても正當の順序を履むに非ざれバ完全なる畫を畫くこと難きを知る可し　今ま日本の畫は前掲西洋畫三種類中最後の者に比するも尚ほ甚だしき者にして則ち專ぱら想像を主とする者たり　又た近年日本畫に影などを付するものあれども其の光線ハ前後左右より集まり居りて各々其の方面を異にし一見嘔吐を催さしむる者あり　又た西洋畫ハ寫生を主として日本畫ハ氣韻を尊ぶと云ふ者あれども是れ亦た西洋畫の何たるを知らざるの言のみ　凡そ西洋畫の妙所は專門家と雖も一二回見たる位にてハ容易に判知し得る者にあらず　又た我が邦にも西洋畫中見るへき者ハ甚た僅少にて鍋島直大、大山巖、中井弘の諸氏が所有せる者あるのみ　宮內省にも一二の見るべき者あれ共多くは見るに足らず　夫の坊間に流布せる者や博物館に陳列せるものゝ如きハ疎の最も甚だしき者なり　然るに此等を目して西洋畫を評するハ苛酷の至りなり　西洋畫も日本畫も疎なるあり美なるあれ共西洋畫ハ氣韻に乏しと云ふが如きは誤謬の極なり　凡そ東西人に限らず名畫を畫く者ハ其の人の伎倆如何に存する者にて始めより想像畫を巧にする者にあらず　然るに想像畫ハ美妙と云ふべからずとて之を學ぶの順序をも講せずして直ちに其の妙所のみを學ハしめんと欲するハ至難のことと云ふべしと物語れり

（同年同月同日『朝野新聞』）

●美術學校　屢々前號に記載せし同學校の創設に就てハ文部省にても目下尚ほ濱尾、岡倉兩氏が擔任して專ら取調べ中なるが同省にてハ初めより壯大なる規模を以て設けんとするに非す　差當り壹万圓許りの用度を目途として凡そ三十名位の生徒を養ふへき考なりと尤も未た確定せる譯に非されは今後如何なる組織となるや知る可らすといふ

（同年同月十一日『郵便報知新聞』）

●鑑畫會の延期　鑑畫會にては明十二日木挽町の貿易協會に於て例會を開き演說幷に繪畫展覽もある筈なりしか都合に依り來る廿六日（日曜）に延引せり

（同年同月同日同紙。同紙広告欄に同一主旨の広告も掲載されている。）

○美術學校教師に關する話　今回我邦にて美術學校を設立することに決せしかハ當地駐劄の伊太利公使ハ其の筋に向て同校教員を其の本國より雇入れんことを請ふに伊太利ハ世人が許す處の美術國にして曩きに美術學校の在りし時は前任公使の駐劄中にて本國より其の教師を雇ひ入れられたるに今回若し本國人を雇入れられさるに於ては拙者の面目にも關する事故是非雇ひ入れありたしとの言を以てせ

しも其の筋にてハ同校に關係ある某氏をして今回ハ日本風を主とするゆえ雇入れの要なきの意を致し之れを謝絶せしめたりと云ふ説あれど信僞如何ハ固より保し難し

（同年同月同日『朝野新聞』）

○曾山氏の美術に關する意見　曾山幸彦氏は舊美術學校の卒業生にして現今工科大學に奉職せる人なるが此頃社員が同氏を訪問して其の美術に關する意見を聞き得たれば左に其の大意を掲載す

天には日月星辰雲霞の文あり地にハ山川草木土石の彩あり其の中間には禽獸蟲魚羽毛鱗介の屬ありて宇宙の物皆な偉象美觀を現はさゞるなく東西洋繪畫の濫觴ハ皆な比に起因す　夫の造家の理は鳥の巣に倣ひ衣服の制ハ禽獸の羽毛に倣ひ皆な天然の粧飾を視て之れを己れに施すに至りしものにて古代ハ文身して体軀を飾るものあり頭手に玉貝を飾るあり衣服器物の類には草卉鳥獸の形を描圖するあり　衣服ハ元と寒を凌ぐが爲めなれども蝦夷に刺繡の美工あり　家屋ハ雨露を防くか爲めなれども埃及には繪壁の良技あり　此等の事實に就て見れば人類ハ天然美を愛するの性を具備せる者なるべし

又た兒童をして衣服玩弄物食物の類を撰ましめハ必らず美麗にして文彩あるものを撰むべく又た文を讀むよりも圖を看るを喜び書を寫すよりも畫を寫すことを好む　之れを以て見るも人にハ美を愛する固有の性情あるを知るべし　人に美を愛するの性情ある以上ハ美術の講究も廢施に委ぬべからず　人文の漸く開け百學百藝競ひ興りて各々世用に充つるの時に際し其効用の最も廣大なるものハ繪畫なり　如何となれば繪畫ハ百工の基礎と爲るものにして其の精粗醜美ハ大に工品の優劣に關すればなり　我が邦上世畫博士を三韓より徵し中世禁裏に畫所を置きしが如きハ皆な繪畫の文化を興すに必要なるを知りしが故なるべし　此を以て名手輩出し其の圖畫後世に傳りて人の貴重せるもの寡なからず　近古室町より德川氏に至るまで畫術衰頽せずして幕府にハ畫廠あり各藩にも亦た畫博士を祿用して其の術を教へしめたり　中古近古の建築工品の精良堅美にして後人の稱贊措かざるものハ繪畫の精巧なるに因れり　夫の奈良の古殿古寶鎌倉室町德川時代の建築器物其他諸般の美術に就て見れば其の然る所以を知り得べし　其の後太平の久しき人情浮華に流れ繪畫も亦た遂に玩物の一種となり餘弊今に及んで振起すべからざるの狀を呈し名工は起らず藝術ハ衰頽し徒らに古風に摸擬して新機軸を開く者なく法度廢壞して蕪雜粗笨に陷り全國至る所殆んと畫と稱すべきものなし　近時諸の製造物が粗惡脆弱なると久用に堪へざるとは一に之れに因らずんばあらず　以上既に説く所の如く畫術と工藝とハ常に興廢盛衰を共にし相密接して決して分離せず工藝の盛ならんことを望むもの豈に先づ畫術振興の策を講究せずして可ならんや　且つ夫れ繪畫ハ人情時勢に從て變遷するものにて太平の世には畫風も亦た自から渾厚雅正の象を現ハし尙武戰亂の世には畫風從て豪宕悲慘の氣を露ハし澆季淫靡の世には畫風必らず浮華柔媚の態を表ハす　又た時の古今と地の東西とに因り嗜好する所異同なきにあらず　是れ則ち南北二派の差と古今兩畫の別ある所以なり　東西各國の畫ハ各々長所ありと雖ども本邦の畫ハ前代には精良を極めしも今は則ち粗惡に陷り西洋の畫ハ則ち之に反し前代精妙にして今世に至り駸々として其の蘊奥を極め將に前代に凌駕せんとす　東西兩畫の相距る亦

た甚だ遠しと云ふべし　且つ邦人にハ概して古畫を尊崇して善惡醜美を判たす只之れに摸擬せんことを勉めて又他を知らず　此の如きハ遠く美術の彊域を距るものと云ふべし　若し夫れ美術にして美術の正經に背くあらば寧ろ之れなきの勝れるに若かざるなり　明治維新の後百般の事物皆な其の法章を泰西に採り百工技藝も亦た面目を一新し貿易通商して彼我相接し殆んど休む期なし　而して其の損益を比較するに彼れ常に利ありて我常に損す　是れ蓋し我が工藝の粗にして彼の精に當るべからざるに由る　今ま之を挽回せんと欲せば須らく先つ百工の精良を求むべし　之を求めんと欲せバ首として繪畫の術を擧げさるべからず　之を擧げんとせば宜しく巧妙の洋畫を採るべし　豈に陋劣の邦畫を用ゆべけんや　初め我が政府美術學校を工部省に置き洋畫を敎へしめ幾時ならずして之れを廢止す　凡そ官府の所爲は民間の標準と爲す所の者なれば其起るや四方翕然として美術を修むるを知り其の廢せらるゝに及びてハ寂然として亦た講習する者あるを觀す　豈に慨す可きの至りならずや（未完）

（同年同月十二日『朝野新聞』）

○曾山氏の美術に關する意見（前號の續）

今諸學校生校の繪畫を見るに之を他藝に比すれハ甚た劣れり　此れ蓋し敎員の畫術不熟練なるに因るものならん　若し夫れ美術學校の設けありて繪畫に志ある者を養成し業成るの後或ハ之を各地學校の敎師となして中學校師範學校の生徒に敎授せしめ師範學校の生徒ハ其の道を學ひて後之を小學生徒に傳習する等の方法を用ひ普通敎科中にて之を習熟せハ各種專門科を修むるの時に及んて裨益する所少なからさるべし　假令ハ航海學を修むる者ハ各地の港灣、燈臺、潮汐の干滿、砲臺、疊塞、船艦の形狀等を寫し兵學者ハ兵勢陣營、戎器、戰鬪等の狀を畫き醫師ハ人體の骨相患部の諸狀等を圖し文學、詩賦、歷史、金石、動植、化學、天文、地理、農商、器械、彫鏤、建築其他萬般の者各々專修する所に從ひ物象を描寫し得るを以て學術を補ひ自他を益するの効最も多し　若し初より繪畫の術を學はすんバ專門科に入て頓に不便を感するのみならす學の進むこと遲く事物に應用するに當りても澁滯して効力を現ハすこと能はす　又た美術を專修したる者の中にも或は畫法敎授に工みなる者あり高尙技術に工みなる者即ち史傳、宗敎、聖賢人、像畫等を製し又は人倫畫敎科用圖本を作る者あり或は應用美術に工みなる者則ち動植物、風景、諸般器物の式樣を圖する等の如き者ありて種々の人士を養成し邦家の文運を發揚するの効少からさるへし　當今美術の學完全ならずして製品粗惡不經に流れ爲めに聲價を失ひ外侮を招く所以の者は世人の嗜好に適合する能ハさるに因る　之に反し歐洲各國就中獨逸、佛蘭西等の製品東西各國に輸して好評を得る者は其の技術の精工に由ると雖も繪畫標本の精良も亦た與つて力あり　或ハ本邦の美術工藝品も歐米各國の嗜好に適し販路漸く擴まり拾收も亦た鮮少ならすと說く者あるへしと雖とも此れ決して不易の說にあらす　外人か本邦の物品を購求するは工藝品の精良なるか故にあらす　只た新奇なるか爲めのみ　一時の玩弄に供するに止るのみ　橫濱開港の初に當り外人か輸入する所の物品咸な新奇なるか故に胡爪形ラムネ罎を花瓶と誤り寫眞撮影を視て魔術とせしか如く其用方をも知らす濫りに之れを愛玩嫌忌せしの狀あり　外人の我か工品を珍玩するも亦

た之れと同しからん　我より彼に輸する者は形狀、品質、粧置、風采常に大同小異にして新工夫に乏し　故に稍や熟するに及んでハ厭倦して又た竟に顧みる者なきに至るべし　之れ近來我か工藝の衰頽し輸出の減少せるに因て證すべし　苛くも之れを挽回せんと欲せハ美術を振興するの他に途なかるへし　繪畫美術の要ハ單に此の點にのみ關せす　之を利用せば或は意想の達せさる所を暢融し或は言語文章の不足を補ふ等其の効用廣大無邊にして幾んと人爲の外に出つるか如し　今や教育の化四方に普及し邊陲呼唔の聲を聽かさるなきの盛況なれとも教科書の挿畫は舊法に因習して線畫を用ひ詳畫を用ゆる者少し　挿畫ハ讀者の感を起すに必要の者なり　和法の線畫ハ眞を寫し實を寫すの工夫に乏しきが故に感動を起すにも足らす　文章の不足を補ふにも足らす　若し洋畫を挿入するに至らハ美術普及の一便法となるへし　且つ夫れ當今の形勢を見るに衣服家居の製日を逐ふて洋制に摸擬す　服色衣裳の繪畫を要するハ言を俟たさるへし　建築工事にハ繪畫の術最も効力ある者なり　室内の粧飾より墻壁天井欄□〔二字不明〕の屬に至るまて其の塗色髹漆舊法の描畫を施せハ其の費用多くして却て脆弱剝褪の患あり　洋法にてハ廣厦大樓の粧ハ大概フリ〔レ〕スコ或は油畫を用ゆる故堅緻精麗嘗て缺損の患なくして本邦畫に勝ること遠し　前陳せる如く教課書の挿畫と室内の粧飾とは共に西洋美術を採らさるへからさるの氣運に向へるに拘はらす之を專修する所なきハ實に聖代の遺闕と云ふへし　歐洲諸邦にてハ咸な美術學校の設けありて生徒の成績最も可なる者は必らす羅馬に派遣して古代の名畫を視察せしむるの制ありて其の留學に關する費用ハ政府一切之を支辨すと　又た藝術拔群の者を寵待するに勲章賞牌等を賜與して其の妙技を稱揚する等奬勵の方法一にして足らす　此の故に技術日に隆盛に向ふ　技術の隆盛ハ竟に邦家の富源を開くに至る美術の學決して廢弛に委すへからさるなり（去る九日の紙上美術專門家の話と題せる項の終りに想像畫ハ美妙と云ふへからずとてとあるとは衍）

（同年同月十四日同紙）

○敘任〔二月十日〕

特命全權公使從三位勲三等　九鬼隆一　米國華盛頓府在勤被免

特命全權公使從三位勲三等　九鬼隆一　兼任圖書頭（敘勅任官二等上級俸下賜）

（同年同月十五日同紙）

○建議書捧呈　豫て記載せし貿易協會幹事諸氏より本邦美術上に關する將來の方針に付其筋へ建議する所ある趣なりしが右ハ愈々一兩日前其筋へ差出したりと聞く

（同年同月十六日同紙）

○美術擴張　宮内省の官制中には從來美術に關する條項を設けあるが今度九鬼公使の圖書頭に兼任したるに付ては一層美術の擴張を計らるゝ由にて夫々着手の方案を取調べの都合なる由

（同年同月同日同紙）

○十一會の意見　同會は舊工部大學美術校より出たる人々の會合にして時ハ明治十一年なり　同志の數も折節十一名なりしより直樣之

を取て會名とし爾來互に相切瑳し隱然退て世間に現はれざりしが昨年の繪畫競進會〔東京府工芸品競進会の誤り〕に始て三十餘幀の油畫を出し大に世人の喝采を得て同會よりも銀牌を賜ハり殊に外國人に賞美されて三百圓以上の額四五枚を買取れしハ同會の榮なりとて當時の諸新聞に嘖々たりしが近來美術學校設立の擧ありとて東西の兩畫何れが宜しきやの疑問起り文部省中にも兩派別れたる抔噂さする折柄同會の意見ハ如何ならんかと一日社員が同會に到り其意見を叩き見しに中には面白き談話もありし故其問答を左に摘錄して觀官〔ママ〕諸彥の一覽に供す

問　西洋畫を學べば本邦固有の趣味を失ふと云ふ者あり　果して信なりや如何

答　是ハ中々に六ヶ敷問題にて唯今一場の御話にてハ盡し難し　然し其大畧を申さバ全體是ハ本邦固有の趣味といふ事を深く察せずして誤解し居る人々の言なり　本邦固有の趣味と申すは繪事の上のみに限らず何事にても本邦の風土人情素と歐米諸國と異なるが爲め縱令歐米人と同一の事業を爲すとも其間自から異なる所あるべし　此異なる所が即ち本邦固有の趣味なり　故に本邦人の平生耳目にする所の禽獸草木の類より其人情風俗に到る迄盡く歐米人と同一に爲りたる以上に非ざれば決して此固有の趣味は失ふ可き者に非す　手近き一例を申さば猶書を學ぶが如し　日本人ハ二千年來支那の文字を學び支那の筆墨を以て支那の法帖を習ひ出來る丈ハ支那人に似せんと欲するも其書する所を見れバ一目して支那人の書に非ざるを識別し得べし　此支那人に異なる所即如何に爲す共脫し得ざる臭氣こそ日本固有の趣味と申すべし　如此く同一の物を用ひて同一の法に由り同一の簡單なる形を書くも尙且同一なる能ハずして日本固有の臭氣即趣味を存す　況んや作者の思想畫中の萬象彼我大に異なる繪畫に於てをや　縱令法のみを彼に取るも夫が爲めに固有の趣味風致を失ふ抔とハ夢々有る可らざることと存ずるなり

問　近來文部省に於て美術學校の事を評議せらるゝと聞く　右ハ固より多くの美術家の集合なるべし　如何なる人人なる乎

答　一人たり共美術家あるを聞かず

問　然らば美術學校の事は美術家なくして取り調べ得べきや

答　萬國古今未だ其例を聞ざれ共本邦人は天性銳敏なるを以て文學に通すれば美術の事ハ自から分るものと見えたり」とて一同微笑せり

問　文部省美術學校に於てハ西洋畫を四五年習學せしめし上更に日本畫を學バしむると云ふ說多しと聞く　右ハ如何なるものにや

答　最好手段と考ふるなり　然しながら此の說恐らくハ採用せられざるべし　若し又た此の說にして勝を制するに至らば創立者の意志に違ふたる結果を見るに至るべし　如何となれバ四五年間も嚴正なる西洋主義に慣らされたる生徒の心ハ無主義なる日本畫に轉ずる事は自然許さゞるべしと考ふるなり　然し政府の嚴命に依り是非とも日本畫に移らしめなば別に習學の勞を取るに及バず　獨りでサツサと畫き得べければ學校の經濟上には得策と考ふるなり（未完）

（同年同月十八日『朝野新聞』）

○十一會の意見（前號の續）

問　西洋畫ハ實物摸寫のみを主とすると云ふ　果して信なりや

答　否々　作者が自己の感情を顯はさんが爲めに實物摸寫に依る者のみ　決して之を以て本旨と爲す者に非ず

問　西洋畫は風致を尊ばざる者なるや

答　否々　西洋畫ハ最も風韻の多き者なり　去れども美術に取て緊要なるもの數多之れに伴ふて畫面に現はれ居るが爲め深く玩味する者に非ざれば見出すこと能ハず　夫故に世間の人は此誤謬を傳ふる事と存ぜらる

問　東西兩畫何れが西洋人の嗜好に適し又何れが多く輸出するや

答　兩方共に嗜好に適し輸出すべし　唯彼れの珍重する程度に至てハ比較にも何にもならぬ事なり

問　比較にならぬとハ如何なる次第にや

答　議論ハ差措て實際の事實を御談じ申さん　去る明治十六七年の頃と覺ゆ　龍池會にてフェノロサ氏の說を用ひ日本全國中屈指の畫家を撰み各得意の大幅を作らしめ之を紅葉館に集めて更に此中より拔群の傑作三百幅許りを撰擢し之に十分の表裝を爲して佛國に送りたる事あり　此諸幅は實に日本畫に於てハ大關勅任官とも云ふべき者のみなりし　時に丁度巴里にてハ共進會の時期にして歐洲のあらゆる好事家が集り居る時なれば必ず一見して萬金を擲つ者あるべしと思ひきやサン〳〵の惡評を得て無據スゴ〳〵と日本へ持返りたり

扨是から先の捌方ハ如何したものと種々協議の上小川町の神保園にて此立派に表裝したる大幅を一本金五圓にて抽籤となし漸く所置を付たりしことあり　扨西洋畫の方ハ如何にといふに全く之に反して目下政府の補護とてハ微塵もなく又民間にて奬勵し呉れる者とても亦一人も無れども吾々貧書生が瘦腕を以て塗立たる油畫が隨分高價にて外國人の手に渡り行くなり　御承知なるべし　昨年の共進會〔東京府工芸品共進会〕などにても我十一會員の拙畫ですら平均一枚が二百餘圓にて英國の商會へ賣れたり　是等の畫は實に西洋畫中に在てハ等外番外下等の下とも云ふ可き者なり　若し之を奬勵する龍池會の如き者有りて周旋したならバ名畫も出來べく捌け方も非常なるべし　右等の事實にて東西兩畫の輸出利益の有無珍重せらるゝ程度等ハ略ぼ御判斷の就く事ならん（未完）

（同年同月十九日同紙）

○十一會の意見（前號の續き）

問　斯く損益得失の實際に付て明かなる事を何とて當路に於ては日本畫のみに左袒せらるゝや

答　實事常に埋れて空論のみ上を走るハ何事に由らず目下の狀況なれば美術の如きも亦然る而已　美術取調など云ふ人々の中に實業家の一人もなきにても御察し下さるべし

問　西洋品に摸擬したる工藝品ハ外國に輸出せずといふ　果して然るや

答　固より然り　單に他人の作物に擬するのみにて自ら創意する事能はざるハ藝術の最も賤むべき極なり　殊に是迄洋品に擬したるもの多くハ彼の肝心なる趣味に擬せずして唯皮相のみ

を眞似たるなれば如何ぞ彼等の嗜好に適すべき　故に工藝品の輸出を計らんとせば先つ其輸出すべき原因を探究し之に應するの識を有する者を養成せざる可らず

問　日本畫ハ世界に冠たるものなりと云ふ人あり　果して信なるや

答　如何にも冠たり　冠たるとハ其奇變なる事なるべし　此の奇變には古代「エジプト」の繪畫も猶ほ三舍を避くべし　殊に近來狩野派を改良せりと稱する者の如きハ奇變中の又奇變なる者にして其奇變なる事彌々世界に冠たりと申さんか

問　フェノロサ氏の美術論ハ貴會に於て信ずるや如何

答　先生の說ハ變幻極り無くして到底了解する事能ハず　例へば先年先生が萬八樓井生村樓等に於て演說せられたる時分には日本畫ハ寫生を爲したる爲めに大に衰へたりとて應擧容齋の輩を擯斥せられ又文人畫ハ寫生もせず物の形に頓着せざる所のみ美術に協へりなどゝ盛んに此說を主張せられしが其後に到り日本の畫家は寫生をせぬのが缺典なりと稱し頻りに狩野家の諸氏に寫生を勸めらるゝと聞く　又二三年前迄ハ西洋畫が日本に入りて大に日本畫の進步を妨げたりとて西洋畫を蛇蝎の如く嫌ハれしが此頃に到りては全く之に反し日本畫の參考にとて去年西洋畫の寫眞などを取集めて來られし類始終矛盾の言語計りにて我輩ハ其本旨のある所を了解する事能はず

（未完）

（同年同月二十一日同紙）

○十一會の意見（前號の續き）

問　西洋に行けバ容易に美術を調べ得べきや

答　御答に當惑致すなり　實際美術を學びたる者に非されバ取調べは扨措き一畫堂の繪畫を見盡すにも大抵三四年間ハ頭腦を惱ますべし

問　近來西洋の美術ハ東洋の美術に倣ふの傾向ありと云ふ　果して信なりや

答　斯る事ハ決して無かるべし　全体西洋畫の大旨と申すハ宇內の萬物何にても苟も我技術に補益ありと認むる者ハ取て以て我材料に爲すに在り　故に彼れの工藝中我の良き部分を拔取りて挿みたるものハ間々之あり　之を見て瞞着手段を用ふる人々尾に尾を添へて西洋の美術ハ逐々東洋の美術に倣ふとか或ハ西洋の美術家が兩三年を出ですして日本に來學するとか飛でもなき事を言ひ囃せども事實を知りたる者の眼にハ誠に馬鹿々々しき事と思はるゝなり　昔し琉球人が日本人の料理中に甘薯を用ひたるを見て日本にてハ追々米穀を廢し我國の如く甘薯を常食とするの傾向あり　我國にてハ總ての耕作を廢し全國一面甘薯のみを作らんと主張したる者ありしと云ふ　誠に似寄りたる話なり」とて大笑せり

問　西洋畫は想像を畫く能はざるや

答　否々　想像を畫くに最も便なり　古人の名作ハ多く想像に係る者あり　彼の「ミケランジエロ」及び「ラフエロ」が筆跡なる羅馬の「バチワン」の壁畫の類筆者の想像を畫きたる者多し　去れども其想像の慥かなるが故に古人の摸型のみに拘

〔泥〕扼する日本畫家の眼にハ實物を其儘摸寫したる如くに見へ想像を畫きたる如く思ハれねバ此誤りを來せる事と考へらる

問　日本畫のみにて實用を足し得るや

答　日本畫と云ふものは中々高尚悠遠のものにして其區域甚だ狹く迚も實用の間に合兼るものあり　抑も日本畫の本來の性質と申す者ハ割合に外れたと云ふ事が一番の骨本故實用と云ふ事とハ頓と方角の違ふたる物にして如何に應用すと雖ども說明の圖抔にて少しも用に足らざる可し　目下ですら學校の掛圖とか書籍の挿畫とか或は肖像とか眞景とか少しく實用に涉る物にして日本畫を用ひたるハなし　是れ日本畫の實用に足らざる證據ならずや

問　日本畫を改良すと主張する人あり　果して改良し得るや如何

答　改良し能ハざるべし　若し在來の畫風を改良せば西洋畫の範圍に入り日本畫と稱すべき所なきに至らん　好し假りに改良し得るとするも古へより理論先づ定りて後技術を改良したる例あらず　今日の如く理論家相集りて如何に評議空論するとも所謂〔席〕席上の水練と一般　到底實際には益なかるべし云々

（完）

（同年同月二十三日同紙）

●日本美術工藝の將來如何

〔同年同月二十八、二十九日、三月二日の『郵便報知新聞』に連載。二月二十六日の貿易協会における鑑画会でのフェノロサの講演を抄訳したもの。翌二十二年岡部宗久編『内外名士日本美術論』にもこれとほぼ同文のものが掲載されており、また、英文の講演草稿も村形明子編『ハーヴァード大学ホートン・ライブラリー蔵アーネスト・F・フェノロサ資料』第二巻（昭和五十九年、ミュージアム出版）に翻訳収録されている。工芸品輸出による外貨獲得競争に日本が勝つためには中等社会を対象にした廉価物品の大量生産では欧米に太刀打できないので、優れた日本人のデザイン力を教育によって一層開発し、富豪を対象とする水準の高い比類なき工芸品を製造輸出することに主力を注ぐべきであり、そのためには美術学校、理学上の知識も応用した宏大な製造所、輸出商会、政府干渉の審査制度等を設ける必要があるという内容。〕

○美術上の會議　昨日文部省に於て岡倉美術學校幹事狩野〔芳崖〕同教授〔員〕及び府下有名の畫工が集會して美術上のことに關し協議會を開きたりと

（同年三月十日『朝野新聞』）

●外國人の皇居拜觀　文部省雇のフェノロサ氏、美術學校幹事岡倉覺三氏等より美術上參考の爲め新皇居拜觀の義を出願せし處特別の廉（かど）を以て許可あり一昨日濱尾專門學務局長と共に拜觀せしか各室の御杉戸幷に御張付の繪畫及ひ彫刻物等の見事なるには頗る感佩せし樣子なりしと

（同年三月十一日『郵便報知新聞』）

●美術學校創立の要旨　解剖學の開けざる前數百年に彫刻せる骨格

其他の物にして今日繪畫の模範と爲すに足るものあり生理、動植物等を心得居らざる日本人が百餘年前に畫ける昆蟲にして西洋人の企て及ハさる迄の妙技に達せる者あり　美術は器械的の仕組にて發達す可きものにあらす　乃ち器械的の仕組に拘束さるゝものは美術として見るべからす　西洋人の畫は兎角實物を摸倣するの密に失し日本人の畫ハ餘り實物を去るの甚だしきに過ぐ　今度文部省にて岡倉覺三氏が專任と爲りて組織取調中なる美術學校は前記の諸弊を除くの目的にて一ハ實物摸倣の圖畫を授け師範學校及ひ中小學校の畫學教師を養成す　其修學期ハ四年なり　他の一ハ氣韻を主として彫刻及ひ漆器、陶器等の應用美術科を授く　其修學期は五年なり　然れども理學の思想に乏しき日本人に向ふて初めより嚴格の希望を以てせは却つて氣韻に饒(ゆた)かなる美術者を失ふの恐れありとて其入學試驗の如きハ極めて簡易を旨とし普通教育を受け一派の畫風を修めたるの人なれバ定員に達するまでは入學を許すとの事あり

（同年同月二十二日同紙）